

【論文】

19 世紀後半から 20 世紀初頭のロシアにおける 「女性問題」と文学

ナザランカ・カチャリーナ

[*резюме*]

«Женский вопрос» и литература в России второй половины 19-го – начала 20-го века.

НАЗАРЕНКО Екатерина

В первой части статьи говорится о зарождении и развитии женского вопроса в России. Начиная с влияния романов Ж. Санд, в исторической перспективе рассматривается развитие российской общественной дискуссии на тему равенства полов. Затрагиваются некоторые исторические события, такие как Крымская война и деятельность медсестёр под начальством Н.И. Пирогова, а также ключевые для развития общественного мнения произведения и статьи.

Во втором пункте объясняется, в чем состоял женский вопрос, затрагиваются различия в положении женщин разных сословий и проблема проституции. Говорится об общественных движениях, таких как нигилизм и феминизм в России конца 19-го века, и об их отношении к женскому вопросу, а также об общественном мнении по поводу этих движений и их представителей.

В третьей части приведением примеров-цитат иллюстрируется отношение выдающихся русских писателей рассматриваемой исторической эпохи (Л.Н. Толстого, Ф.М. Достоевского, И.С. Тургенева) к нигилизму и образу «новой женщины», воплощенному нигилистками, а также к половому равноправию и «свободной любви».

Заключительная часть представляет собой экскурс в более позднюю эпоху Октябрьской революции и рассказывает о роли «новой женщины» А.М. Коллонтай в революционном движении и преобразовании общества после успеха революции. Также говорится о деятельности Женотдела и его гуманитарной и просветительской роли в постреволюционном русском обществе. В конце подводится итог о влиянии революции на становление равноправия и «новой женщины» в России.

キーワード：女性解放、ロシア文学、フェミニズム、ニヒリズム、新しい女

1. ロシアにおける「女性問題」の提起及びその発展

ロシア社会において「女性問題」が初めて提起された年として、リチャード・スタイツは1855年を挙げ、それをクリミア戦争に従軍していた女性看護師と関係づけている¹。だが、それ以前にも「女性解放」はロシア社会において話題として提起されることがあった。例えば、1830年代から「心の自由」を唱えていたフランスの女性作家ジョルジュ・サンドの小説はロシアの知識人に影響を与えていた。ジョルジュ・サンドのヒロインたちを一義的に「新しい女」と見なすことができるかどうかは疑問が残るが、少なくとも恋愛に関して彼女たちは自由な価値観を持ち、離婚を受け入れない当時のブルジョワジーの道徳に疑いをさしはさんでいた。男女を問わず当時のロシア貴族はジョルジュ・サンドの小説を愛読しており、それは恋愛や離婚の自由について論じるきっかけになった。またそれは女性解放運動の先駆者であるアレクサンドル・ゲルツェンが1846年に出版した小説『誰の罪か?』の着想を得る契機になったとされている。

クリミア戦争（1853年-1856年）における敗戦は、ロシア帝国が政治的及び社会的に劣っていることを国際社会、そしてロシア人自身に知らしめた。女性問題に関する話題が戦争中に教育者であり外科医のニコライ・ピロゴフによって提起された。彼は女性看護師を戦線に派遣することを提案し、上級の軍人がそれに反発していたにも拘らず、163人の女性を含むボランティアのグループを作って、己の意志を貫くことができた。看護婦の積極的な援助については、トルストイの『セヴァストポリ物語』の中で語られている。戦争が終わってからも、看護婦の成功に自信を得たピロゴフは女性問題について論じ、特に女性に対する教育の重要性を主張していた。

女性問題は特に60年代からロシアの文学やジャーナリズムの分野で話題になっていた²。以前のファッションや美容というテーマに限られていた婦人向けの雑誌はロシア社会の要求を満たしきれなくなり、文学や科学の記事を中心とした新しいタイプの婦人雑誌が誕生した。当時、この新しいタイプの雑誌は短命に終わることが多かったが、その種の最初の試みとして『夜明け』誌（«Рассвет»）（1859-1862）、そして初めての女性出版者による『女性の報知』誌（«Женский вестник»）（1866-1868）などが刊行されていた。

60年代のロシアの女性解放運動にとって、ニコライ・チェルヌイシェフスキーの先駆的な小説『何をなすべきか?』（1863年）は最も重要な作品の一つになったに相違ない。精神的な面及び経済的な面においての女性解放、コミュニケーションで実現される自由な労働、結婚や恋愛の自由などというテーマが当時のロシア社会に極めて率直に提起された。刑務所でチェルヌイシェフスキーによって書かれ、検閲官の目をすり抜けて出版されたこの小説はロシア社会でセンセーションを巻き起こした。空想的社会主義のいささかナイーブな思想を持っている『何をなすべきか?』の主人公たちの話は、一見恋愛小説に似ていたが、実際は革命家の話であり、出版されてから1917年の10月革命に至る急進的な若者にとってある種の「聖書」になったと言える。

チェルヌイシェフスキーを始め、西欧主義者の知識人は一般的に女性解放運動を支持していた一方、トルストイやドストエフスキーなど、多くの最も知られている19世紀のロシア人作家や思想家はどちらかというと保守的な立場を取っていた場合が多かった。急進的な女を度々あざ笑うトルストイによって同時期に書かれた『伝染した家庭』という戯曲は『何を

なすべきか?』に対する批判的な答えになっていた。この戯曲には 3 でより詳しく触れることにする。

イギリスの社会思想家ジョン・スチュアート・ミルの 1869 年の「女性の解放」(‘The Subjection of Women’) という記事は翌年にロシアで出版され、西欧主義者とスラブ主義者の間で議論を誘発し、ロシアの「女性問題」の転換点となった。スラブ主義者であった思想家のニコライ・ストラホフが「女性の解放」への回答として「女性問題」(«Женский вопрос») という記事を同年『ザリャ』誌に投稿した。ミルは、男女の相違点と共通点について論じ、男性の優れた体力によって男女の間に力関係が生まれ、女性はずっと抑圧されてきたと述べている。その力関係のせいで、女性の性質の中では何が先天的であるか、何が社会によって規範として植え付けられたのか、判断できないという結論に至る。結局、女性と男性は、生理的な違いや体力の差を除き、実際には相違点を持っていない可能性があり、男性と同じ法的権利を女性にも与えるべきだとする主張である。

それに答えるストラホフは、イギリスとロシアのそれぞれの社会で女性が占めている地位を比較しながら、女性を相続者として認めるロシアの相続権を例として挙げ、ロシア女性のほうが法的に有利であると述べている。そのために、ロシアでは「女性問題」がイギリスほど深刻ではないという結論になる。同時に、ストラホフは法的権利がミルの「女性の解放」において中心的な位置を占めていることを嫌がり、自己犠牲や己の家族に対する排他的な愛情こそが女性の先天的な気質に他ならないとミルに反論しながら、「優れた精神的な品性では、男性は女性に比肩できない」(«мужчины не могут равняться с женщинами в достоинствах сердечных чувств») と主張する³。ナショナル・ロマンティズムに近いスラブ主義の保守派の代表者だったストラホフはイギリス人の唯物論をあまりにも厭っていたが、彼自身の論理付けはやや空想的に見える。女性が精神的にいくら優れても、それは完全な法的権利を与えないという口実にはならず、ストラホフの単純で一般化された理論に従えば、女性は逆に男性よりもその権利に相応しいように見える。

2. 「女性問題」と社会運動

上記の通り、60 年代のロシア社会で女性問題は深刻な話題の一つになっていた。ただ、当時女性問題は多くの場合、ニヒリズムやコミュニズムなどの一般的に恐れられている運動に関連づけられていたため、真面目な公開討論を行うことさえ難しかったとスタイツは指摘している⁴。ニヒリズムや男女のその代表者たちは如何に文学作品においてあざ笑われていたのかは 3 で詳しく論じることとし、ここではニヒリズムを始めとする当時のロシアの社会運動を概観していく。それに先立ち、「女性問題」という概念がどのような内容を含むものであったか、明確にしたい。

女性の立場において、一番際立つのは、ミルが論じていた法的権利の不足であろう。その中に、離婚の事実上の不可能性があり、男女両方の人生において悲劇を招く原因になることは珍しくなかった。『誰の罪か?』や『何をなすべきか?』というリベラルな作者の作品から、保守的な思想を持っていたトルストイの『アンナ・カレーニナ』まで、この問題をテーマとした作品は数多く見られる。既婚の女性が夫以外の人と恋に落ち、それに悩んでいるというのがそれらの基本的なプロットである。『何をなすべきか?』の楽観的な成り行きと異なり、

アンナ・カレーニナの場合、それは自殺という悲劇的な結末に至る。

当時のロシア法は正教に大いに影響されていた。唯一夫婦が別れるに値する理由として、キリスト教は「不品行」、言い換えれば、不倫を認めていたが、離婚が許されるためには、不倫を目撃した二人の証人が必要とされており、それは事実上不可能に近いことだった。他に女性が法的に縛られていた例として、未婚の女性が結婚したり、外国に行くためには両親の承諾が必要であり、結婚後は夫の承諾が必要だったことが挙げられる。現在からみると、未成年者のような扱いを受けていた女性は、貴族の未亡人という例外を除き、自立した人生を送ることはおろか、自由に移動することさえできなかった。言うまでもなく、選挙権を含む参政権も19世紀のロシア人女性は持っていなかった。

次に経済的依存を挙げることができる。女性は中等教育を受けていたが、1860年代まで大学に入学することも、聴講することも許されていなかった。良妻賢母を育成するために、当時の女性教育では家事や社会的スキルに焦点が当てられていた。その理由で、男性と同じ仕事をするのは不可能になり、経済的に親や親戚、もしくは夫に依存する以外の道はほとんどなかった。チェルヌイシェフスキーの『何をなすべきか？』では、当時の社会における女性の立場について主人公ヴェーラは次のように語っている：

社会生活の殆どすべてが、正式にハッキリと我々に閉されている。そしてハッキリとした形式によって閉されていない事柄は、実際の困難のために閉されている。家族だけが、我々には残されている。家族の外に、どんな職業に従事することが出来るだろう？家庭教師の職業が、殆ど唯一の職業である。多分、我々にもう一つの仕事——時間定めで教える仕事（しかもそれは男達が選び残した余りの）がある⁵。

例外は女性農民であり、彼女たちは男性と同様に幼いころから農作業に従事していたが、それは経済的な自立に繋がることはなかった。人口の四分の三を農民が占めていた19世紀末のロシアでは、女性に対する家庭内暴力も伝統と見なされ、たいていの場合文盲の女性農民たちは町の女性よりも息苦しい状況に置かれていた。当時の女性農民の辛い人生についてはニコライ・ネクラソフの『誰にロシアは住みよいか』（1876年）で確認できる。1861年の農奴解放令後、産業化が進み、田舎の狭い空間から女性農民はより良い生活を探しに町に行こうとしたが、到着先の鉄道駅では合法化されていた売春宿の代表者が彼女たちを出迎え、様々な説得法を使うことによってその女性の一部を売春に巻き込んでいった。教育不足のために一度売春に巻き込まれ、「黄色いチケット」という娼婦のパスポートをもらった女性にとっては、そこから抜け出すことは極めて難しかった。

女性の経済的自立について初めて公に説いたのはマリヤ・ヴェルナーツカヤだとされている⁶。教授をしていた彼女の夫から経済学を学んだ後に、夫婦が一緒に出版していた『経済指標』誌（«Экономический индекс»）（1857-1861年）にマリヤは女性労働についてなどの記事を投稿していた。農奴解放令が出たことはロシアの産業化を促進した一方、農奴に長年頼ってきた貴族の経済力を脅かした。女性を含め労働力の需要が高まり、女性の教育を巡る議論や活動も一層活発になった。ロシアのフェミニストたちは参政権や法的権利よりも、まず女性が男性と同等の教育を受ける権利の獲得に尽力した。実際に、「フェミニスト」を名乗っ

てはいなかったが、女性の教育権利、労働権利のために活動していた貴族の女性がいた。その中に、アンナ・フィロソフョヴァ、マリヤ・トルブニコヴァ、ナデジダ・スターソヴァの名前が認められる。彼女たちの努力は「貴族の慈善」に過ぎないとしてより急進的なニヒリストやナロードニキに批判されていたが、その努力の結果女性労働を支える「安いアパートの会」や「女性翻訳者の会」が生まれ、1878 年に初めての女子大学、「ベストウージェフコース」が開かれた。革命家ナデジダ・クルプスカヤもそこで勉強していた。

女性を抑圧していた他の要素としてはジェンダー的偏見と身体の不自由が挙げられる。19 世紀のロシアでは女性が就ける職は限られていたが、存在はしていた。それは例えば、助産婦、家政婦、家庭教師（主に音楽や言語の）、メイド、裁縫師、歌手、女優などだった。ただ、中流及び上流の女性にとってはその職を含め、一般に就職は「恥ずかしい」ととされていた。女性の運命は家族に尽きるというのが、少数の例外を除き当時の一般常識だった。トルストイやストラホフをはじめとするスラブ主義者の知識人もその見方をもち、家族を作らなかった女性の人生は社会から「失敗」と見なされていた。他方、結婚した場合、避妊の知識のなさや中絶の禁止のために子育てや家事に追われ、それ以外の活動に使える時間がないのが普通であった。

そうした社会的偏見や伝統を破ろうとしたのは、ニヒリズム運動の代表者たちだった。ニヒリズム（虚無主義）は西欧主義を背景に 60 年代にロシアで生まれたが、本来の西欧主義より一層急進的だった。名前からもうかがえるように、ニヒリストたちは社会の常識、伝統やしきたりを拒絶することを特徴としていたが、他にも自然科学への関心、女性解放及び革命運動への参加が見られた。「ニヒリスト」は社会に恐れられ、またこの言葉が罵り言葉になるほど軽蔑されてもいた。当時のロシア文学においても「ニヒリスト」は極めて否定的なイメージを与えられていた。

3. 当時の文学におけるニヒリズムやニヒリスト女性のイメージ

19 世紀ロシアの様々な社会運動の代表者たちから、もし平塚らいてうに代表される日本の「急進的な女」かつ「新しい女」という概念に当てはまる女性像を見つけ出そうとするならば、最も近いイメージは女性のニヒリスト、「ニヒリストカ」となるだろう。ただ、日本と異なり、彼女たちは革命運動に強く関連付けられており、日本よりも一層一般に受け入れられ難い存在だったと言える。スラブ主義者はともかく、ツルゲーネフのような西欧主義者の作家たちでも、己の作品でニヒリストの代表者たちを極めてアイロニカルに描いていた。

文学においても、世論においても、ロシアの「新しい女」の一般的なイメージはメガネをかけ、短い髪形をし、清潔感のない衣装をするなどだらしない格好をしている女性、喫煙の習慣を持つ女性だった⁷。内的な特徴を挙げると、家族の概念や女性らしさを完全に拒絶し、乱交を含む堕落した生活を好むように彼女たちは描かれていた。自身の醜さから結婚できずまた家族を持てないがために、独立を求め解放運動に彼女たちは身を投じるというのが当時の世論であった。その一つの例はツルゲーネフの『父と子』(1861 年)でうかがえる。虚無主義者クークシナの家と彼女自身は次のように描かれている：

彼等が入った室は客間というよりはむしろ仕事部屋のようであった。書類や手紙やそ

の多くは切ってない部厚なロシアの雑誌などが、あちらこちらに据えた埃だらけのテーブルの上に散らばっていた。至るところに巻煙草の喫殻が投げ散らされてあった。皮張りの長椅子には一人の貴婦人が半ば身体を横にしていた。彼女はまだ若々しく、白っちゃけた頭髪をいくらか振り乱して、余り清潔とは言われぬ絹の衣服を着て、短い両手には大きな腕輪を嵌め、頭にはレースの襟巻を被っていた。彼女は長椅子から起き上って、黄味を帯びた狼の毛皮を付けた天鵝絨の外套を無造作に自分の肩に引っ掛けながら、「今日は、ヴィクトルさん。」と、気怠そうに呟いて、シートニコフの手を握った⁸。

「埃だらけ」、「巻煙草の喫殻が投げ散らされて」、「余り清潔とは言われぬ絹の衣服」というのは全て急進的な女性のイメージに関連付けられた「だらしない恰好」、「墮落した生活」を想起させるものだ。「切ってない部厚なロシアの雑誌」というのは、科学に関心を持っているかのように気取っているクークシナが、実際はそれを読んでいないということで、彼女の浅はかさを仄めかしている。

主人公のバザーロフもニヒリストであるが、彼でさえクークシナを含め、急進的な女をあざ笑っている。バザーロフこそ男女平等や女性解放の支持者であるはずだが、彼の言葉「僕の考えでは、女で自由思想を懐くような者は、碌な者でない」⁹（ロシア語の原文では「碌な者でない」と訳される「уроды」、つまり「ブス」、「フリーク」というはるかに強い言葉が使われている）は極めてシニカルで、皮肉なことにニヒリストを批判する世論と同様である。

ツルゲーネフと社会思想が大いに異なっていたトルストイの小説においても、同じようなニヒリストのイメージがうかがえる。その内の一つ、1864年に書かれた戯曲『伝染した家庭』は劇作家アレクサンドル・オストロフスキーに厳しく批判され、1928年まで未刊のままだった。トルストイ自身も結局、この作品は失敗作であるという認識に至ったが、ニヒリストに対する彼の偏見や敵意はどの作品よりもこの戯曲でよく表されている。

ヴェネローフスキイ：では、いいですか——ぼくはね、この前あなたと会った時に話したことについて、考えたのですよ。婦人についてね、考えたのですよ。つまり現世紀のおもなる使命のひとつ——それは婦人が圧迫されている野蛮な奴隷状態から彼女たちを解放することにあるのですからね。

リューボチカ：そうですわ、どうして二度目の結婚をしてはいけないのでしょうか？わたしもときどきそれを考えましたわ。もし急にひとりの夫に飽きがきて、いやになったら、わたしはすっかり愛を失って……。

ヴェネローフスキイ：やれやれ、いやはやどうも、群衆の口にかかると婦人解放の偉大なる教理も、そこまで歪曲されてしまうんですかね。それはちがいますよ、まるでちがいます。婦人の自由とは、婦人が男子と同権になって、永久に、父親の、のちには夫のお荷物にならないことをいうのです。婦人も社会の中であって、自分の足の上にしっかりと立ち、この社会をまともに正視する力を持たなければいけません¹⁰。

ここでのヴェネローフスキイの発言は、現在の読者から見ると妥当で合理的なものに見え

るだろう。しかし、作品のコンテクストにおいて、ヴェネローフスキイはナルシストで偽善者であるなど否定的な性格を持つ主人公であるため、彼の発言がいかにも正しく思われても、読者にはそのように受け取られない。「野蛮な奴隷状態」や「婦人解放の偉大なる教理」などのわざとらしい誇張表現からも、トルストイが女性解放に対する皮肉を言語手法によっても表そうとしていることが分かる。

女性解放運動においてトルストイが最も恐れていたのは、「自由恋愛」つまり無責任な肉体関係だった。『伝染した家庭』では、ヴェネローフスキイはカテリーナと肉体関係を持っていたにも拘らず、彼女の女性解放への崇拜を利用し、責任から逃れようとしていた。そして、カテリーナに告白されても、「正直に」断り、彼女の従姉妹リューボチカと結婚することに決める。結局のところ、それは男女平等の概念を悪用した欺瞞のようなもので、周りの人を傷つける行為でしかなかった。

トルストイを含め、当時の知識人の多くが離婚を受け入れていなかったことは、おそらく「自由恋愛」、言い換えればニヒリストに関連付けられている「乱交」に対する彼らの恐れに関係していた。ここには婚外の性交渉を「不品行」と見なすキリスト教の影響がうかがえる。また、当時の避妊手段やその知識の不十分さのために、それは当時の状況ではある程度妥当な考え方でもあった。トルストイの思想は「ミソジニー」として、特に 20 世紀に入ってから批判されるようになったが、当時のロシアの現実から見ると、婚外の肉体関係、またその結果が特に女性にとって取り返しがつかなかったことを考慮すれば、彼女たちの味方になり、無責任な男性を絶えず批判していたトルストイはミソジニストのように思えない。

一般的に女性教育を支持していたドストエフスキーも、小説の中でトルストイ及びツルゲーネフと同様にニヒリストをあざ笑い、「男女平等」などの彼らの原則に疑問を抱いている。例えば、長編『罪と罰』(1866 年)では、急進主義者レベジャートニコフはルージンに女性と殴り合いしたことで笑われ、次のように答える：

あなたは自分が腹が立って、むしゃくしゃするものだから、わざと突っかかってくるんでしょ あんなの下らない話で、婦人問題なんかには決して少しもふれちゃいません！ あなたの解釈は間違っています。わたしはこう考えたんですよ。もし婦人が万事につけて、体力までも男子と同等だとすれば（このことはもう肯定されていますよ）、そうすれば従って、あの場合だっても平等でなくちゃならんはずですよ。もっとも、後でよく考察した結末、そんな問題は本質的に存在すべきでない、と論決しました。なぜかといえば、喧嘩はあってはならないもので、喧嘩なんて場合は来るべき社会に於いて、考えることさえできないものだからです (...) わたしが法事に行かないのは、ああした不快ないきさつがあるからじゃない。ただ主義として行かないだけです。法事などといういまわしい偏見の仲間入りをしたくないからです、そうなんですよ！ そりゃ、もっとも行ったってさし支えはないですよ。ただ冷笑してやるために¹¹。

レベジャートニコフはチェルヌイシェフスキーの『何をなすべきか？』の主人公たちと並び、理想主義者で、争いのない明るい未来を信じている。ただ、チェルヌイシェフスキーが描いた人物たちはナイーブでありながらも、優しく、誠実で、お互いを尊敬し合う人たちで

あった。一方、レベジャートニコフは、亡くなった夫の法事という同情を誘うような場面でも、冷笑するためにしか行く意味がないと断言する。いくら社会のしきたりを拒絶する虚無主義でも、亡くなった夫の妻を冷笑するという人が実際にいたのか、それともドストエフスキーが誇張して描いているのか、判然としない。

20 世紀では特に、革命家や急進主義者が肯定的に描かれるようになっていった。例えば、プロレタリア文学者ゴーリキーの中編『母』（1906 年）においては、虐げられた文盲の女性が理想のために犠牲になるほど熱心な革命家へ転身したことが描かれている。ただ、既に述べてきたとおり、19 世紀後半ロシアの一流の作者たちが急進主義者を多くの場合受け入れていなかったことは確かである。

4. 十月革命と「新しい女」

日露戦争（1904~1905 年）とそれに続く第一次世界大戦（1914~1918 年）は、ロシアの女性に新しい職場を提供した。戦争で亡くなった男性の代わりに女性たちは工場の労働者や電信の職員を始めとし、あらゆる分野で益々活躍するようになった。もっとも、欧州のように女性労働者の労働時間や労働条件は男性と同様だったが、平均給与は男性より大分低かった¹²。さらに、母性保護がほとんど行われず、産休が与えられていなかったため、妊娠中でも有害物質に晒され、10 時間以上の労働をさせられることが普通だった。そのために、女性労働者における流産や乳児死亡率はブルジョワ階級の女性の数倍に達した。

1905 年ころから、女性労働者はフェミニズムの活動家にも、革命を企てていた社会民主主義者にも注目され始めた。ロシア社会民主労働党は女性解放を労働者解放の一部と見なししていた。改良主義のフェミニストたちは革命を支持しないがために敵であるというのが、ウラジーミル・レーニンに代表されるロシア社会民主労働党の立場だった。女性労働者が「ブルジョワ的な」フェミニズム運動に巻き込まれないように、「貴婦人」のフェミニストたちはプロレタリアの味方になれないと主張し、フェミニストのミーティングを意図的に混乱させていた。つまり、男女という対立ではなく、ブルジョワとプロレタリアートの対立、言い換えれば階級闘争のほうが深刻であると、マルクス主義者たちは確信していた。

アレクサンドラ・コロンタイはこのようなマルクス主義的な社会民主主義の活動家の一人であった。彼女はブルジョワの家庭に生まれたが、ナロードニキの思想を持っていた家庭教師の影響を子供のころから受け、若いころから労働者解放運動に興味を示していた。彼女自身の言葉によると、彼女が掲げる人生の目的の一つは女性の解放で、もう一つは資本主義国家の帝国主義政策との戦いだった¹³。彼女は労働者についての記事を多数投稿していた一方、女性の役割についての探求も絶えず行っていた。その中でも、小説（『三代の恋』、『姉妹』など）、記事やエッセイ（『社会と母性』、『恋愛と新道徳』）といった形で社会や労働、家族や母性、恋愛に関する己の社会主義的思想を表明していた。日本語に『赤い恋』というタイトルで訳されたコロンタイの小説『ヴァシリーサ・マルイギナ』は日本で 1923 年に紹介され、ある種のセンセーションを起こした¹⁴。レーニンと親しかったコロンタイは、革命後政治や社会に様々な形で関わっていた。彼女はヨーロッパ初の女性閣僚（人民委員）になり、世界で二人目の女性大使にもなった。

1913 年にコロンタイは『新しい女』という記事を発行し、新しい女を「独身女性」と言

い換えた。その新しいタイプの女性を次のように描写している：

(...) это какой-то новый (...) тип героинь, незнакомый ранее, героинь с самостоятельными запросами на жизнь, героинь, утверждающих свою личность, героинь, протестующих против всестороннего порабощения женщины в государстве, в семье, в обществе, героинь, борющихся за свои права, как представительницы пола. «Холостые женщины» - так все чаще и чаще определяют этот тип. «Die junggesellinen»...

Основным женским типом близкого прошлого была «жена», женщина-резонатор, придаток мужчины, его дополнение. Холостая женщина менее всего «резонатор», она перестала быть простым отражением мужчины. Холостая женщина обладает самоценным внутренним миром, живет интересами общечеловека, она внешне независима и внутренне самостоятельна¹⁵.

(...) これは今まで知られていなかった、新しいタイプのヒロインである。人生に対する自立の要求を持っているヒロイン、自身の自我を確立しているヒロイン、国家や家族、社会における女性の多岐にわたる奴隷化に抵抗し、性の代表者として自身の権利のために戦っているヒロインなのである。このタイプは「独身女性」として定義されることがますます増えている。「独身女性」...

近い過去の主な女性のタイプは「妻」であり、「共鳴する女」、男性の付録、彼の補足だった。独身女性は「共鳴する女」とはかけ離れており、男性を単に反映するものではなくなった。独身女性は価値のある内心世界を持ち、一般的な人間の関心を持って生きている。彼女は外的にも独立しており、内的にも自立している¹⁶。

ここで言う「独身女性」というのは、実際の結婚ステータスとは関係なく、単に女性の精神的な自立を指していると考えられる。コロンタイにとって、このような「独身女性」すなわち「新しい女」の例はドイツのマルクス主義の活動家ローザ・ルクセンブルクだった¹⁷。ロシアでは、コロンタイが「新しい女」の概念を導入したことで有名になり、彼女自身も時代で最も卓越した新しい女になったと言える。

1920 年代に作られた女性政策機関「女性部」(«Женотдел») では、一時期コロンタイが部長を勤めていた。1926-1927 年にメンバー 60 万人以上に到達した女性部は、『女性労働者』誌を出版するなど、ソビエト連邦全国で社会主義のプロパガンダを行い、女性の生活状況を改善するため、非識字者をなくすために努力を払い、新しい形態の結婚、教育、労働法について女性を指導するという教育活動を行っていた。他に、ストリートチルドレンの世話、学校や職場の審査、立法活動といった形で社会において積極的で効果的な活躍をしていた。女性部の女性メンバーはこの活動によって自身の人生を危険に晒していた。例えば、イスラム教の影響が強い中央アジア地域において、その活動に対する反発で年間数千件もの女性活動家の殺人事件が発生した。それにも拘らず、イスラム地域でも活躍は続き、益々メンバーを増やしていた。しかし、ヨシフ・スターリン政権に代わってから、女性部の活動は徐々に縮小させられていった。1930 年にプロパガンダ部門の一部になり、1934 年にスターリンが「女

性問題は解決された」と宣言した後に、女性部は閉鎖された。

結論としては、「女性問題」に対する十月革命の二義性を挙げることができる。欧州を含め世界の多くの国々より早くロシア女性も革命によって参政権を含む男性と平等の権利が与えられた。他方で、殆どのボリシェヴィキは女性解放を労働者解放の一部としてしか見なさなかったため、最初ブルジョワのフェミニズム運動に対抗し、革命後は一時的に「女性部」が幅広い活動を行っていたが、スターリンはそれを含め全てのフェミニズム的な運動を禁止した。同時に、革命によってコロンタイのような言葉通りの「新しい女」が地下から公に姿を現し、ソビエト連邦だけではなく、フィンランドやスウェーデンを始め、世界中で積極的、効果的な役割を果たすことができた。十月革命から100年を迎えたが、社会主義体制が瓦解したこともあり、今日ではこの画期的な出来事を批判する声は圧倒的に多い。だがロシアを始めとする世界の女性解放運動にとってその肯定的な役割を否定することはできないと言える。

註

- 1 Stites, Richard. *The Women's Liberation Movement in Russia*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1978. pp. 29-31.
- 2 Эйхенбаум Б. Лев Толстой. Семидесятые годы. Л., 1974. С. 360.
- 3 Страхов Н. Женский вопрос. // Мужские ответы на женский вопрос в России. Вторая половина XIX в. – первая треть XX в. Антология. Том II / Под ред. В. Успенской. Тверь, 2005. С. 73. [http://tversocium.ru/library/data/downloads/book7_2.pdf] (2017 年 11 月 11 日閲覧。以下、URL の最終閲覧日は全て同一である。)
- 4 Stites, *op. cit.* p.73.
- 5 チェルヌイシェフスキイ『何を為すべきか』神近市子訳、南北書院、1932 年、584 頁。
- 6 Stites, *op. cit.* p.73.
- 7 Хорольская М.В. Образ «новой женщины» в России XIX-XXI вв. или Почему в России так сложно назвать себя феминисткой. 2014. [<http://genderpage.ru/?p=1453>]
- 8『ツルゲーネフ全集』第4巻『父と子』昇曙夢訳、六芸社、1937 年、119 頁。
- 9 同上、138 頁。
- 10『トルストイ全集』第12巻『伝染した家庭』中村白葉訳、河出書房新社、1973 年、313 頁。
- 11 ドストエフスキー『罪と罰』米川正夫訳、『ロシア文学全集』第4巻所収、修道社、1959 年、335 頁。
- 12 Stites, *op. cit.* p.162.
- 13 Бреслав Е. Александра Михайловна Коллонтай. М., 1974. С. 19.
- 14 杉山秀子『コロンタイと日本』新樹社、2001 年、10 頁。
- 15 Коллонтай А. Новая мораль и рабочий класс. Новая женщина. М. 1919. С. 5. [http://www.pseudology.org/Bolsheviki_lenintsy/Kollontay_NovayaMoralRabochiyKlass2.pdf]
- 16 翻訳は本稿の著者による。
- 17 Бреслав. Там же. С. 86.

参考文献

杉山秀子『コロンタイと日本』新樹社、2001 年。

チェルヌイシェフスキイ『何を為すべきか』神近市子訳、南北書院、1932 年。

『ツルゲーネフ全集』第 4 巻『父と子』昇曙夢訳、六芸社、1937 年。

『トルストイ全集』第 12 巻『伝染した家庭』中村白葉訳、河出書房新社、1973 年。

ドストエフスキー『罪と罰』、米川正夫訳『ロシア文学全集』第 4 巻所収、修道社、1959 年。

Mill, John Stuart. *The Subjection of Women*. New York: Dover Publications, 1997.

Stites, Richard. *The Women's Liberation Movement in Russia*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1978.

Бреслав Е. Александра Михайловна Коллонтай. М., 1974.

Бушканец Л. Лев Толстой и женский вопрос.

[<http://kpfu.ru/news/lev-tolstoj-i-39zhenskij-vopros39-73577.html>] (2017 日 11 月 11 日閲覧。以下、URL の最終閲覧日は全て同一である。)

Коллонтай А. Новая мораль и рабочий класс. Новая женщина. М. 1919. [http://www.pseudology.org/Bolsheviki_lenintsy/Kollontay_NovayaMoralRabochiyKlass2.pdf]

Страхов Н. Женский вопрос. // Мужские ответы на женский вопрос в России. Вторая половина XIX в. – первая треть XX в. Антология. Том II. Под ред. В. Успенской. Тверь, 2005. С. 56–98. [http://tversocium.ru/library/data/downloads/book7_2.pdf]

Толстой Л.Н. Мысли об отношениях между полами // Мужские ответы на женский вопрос в России. Вторая половина XIX в. – первая треть XX в. Антология. Том II. Под ред. В. Успенской. Тверь, 2005. С. 120–167. [http://tversocium.ru/library/data/downloads/book7_2.pdf]

Хорольская М.В. Образ «новой женщины» в России XIX–XXI вв. или Почему в России так сложно назвать себя феминисткой. 2014. [<http://genderpage.ru/?p=1453>]

Эйхенбаум Б. Лев Толстой. Семидесятые годы. Л., 1974.